

ドイツ・バッハズリステン

マタイ受難曲

DEUTSCHE BACHSOLISTEN

J. S. BACH: Matthäus-Passion

指 独	揮 唱	ヘルムート・ヴィンシャーマン マーティン・ペッツォルト (テノール/福音史家) 三原 剛 (バリトン/イエス) 豊田 喜代美 (ソプラノ) 佐々木 まり子 (アルト) 佐々木 正利 (テノール) 福島 明也 (バリトン)
合	唱	盛岡バッハ・カンタータ・フェライン 仙台宗教音楽合唱団 岡山バッハカンタータ協会
合 唱 指 揮		佐々木 正利
児 童 合 唱		東京放送児童合唱団
児童合唱指導		古橋 富士雄
第1オーケストラ		ドイツ・バッハゾリステン
第2オーケストラ		東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

1993. 10. 29 (金) 新宿文化センター・大ホール
主 催 ◆ 財 団 法 人 新 宿 文 化 振 興 会

ヘルムート・ヴィンシャーマン (指揮) *Helmut Winschermann*



1960年フランクフルトにおいてドイツ・バッハゾリステンを創立。以来、芸術監督として今日まで30年間全責任を持ち、この室内楽オーケストラを独特のスタイルを持つアンサンブルに育て、特にバッハ演奏において世界的に権威ある演奏団体にした。ヴィンシャーマンは、オーボエを手にしても指揮棒を握っても、ステージに立つときは常に「明晰に、生き生きと、喜ばしく」という彼のモットーを貫いてきた。音楽監督としては、「フランクフルト・バッハ演奏会」(20年間)、ケルン・バッハ協会「オーケストラ演奏会」(7年間)などを手掛けた。

ヴィンシャーマンは演奏家である一方、優れた教育者としても知られ、1956年デットモルト国立音楽大学の教授に就任。オーボエと室内楽のマスタークラスを受け持ち、ハンスイェルク・シェレンベルガー(ベルリン・フィル)、宮本文昭(ケルン放送響)など、優秀な後継者が輩出した。

音楽学者でもあるヴィンシャーマンは、多くのバロック音楽の楽譜をジコルスキー社より出版、またレコードはドイツ・グラモフォン、ベーレンライター、フィリップス、RCAなどより50枚以上出したが、最近では、CDでカプリチオ社よりバッハのオーケストラ曲、ヘルマン・プライとのカンタータなどをリリースしている。

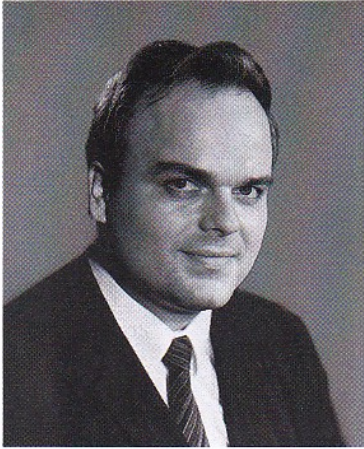
ドイツ政府より、最高の一等功労十字勲章、レコードに対して権威あるエディソン賞2回グスタフ・マーラー賞など、多くを受賞している。

ドイツ・バッハゾリステン *DEUTSCHE BACHSOLISTEN*

1960年、オーボエの世界的名演奏家、ヘルムート・ヴィンシャーマンは、ドイツで定期的に行われていたフランクフルト・バッハ演奏会を母体に、毎年この演奏会のためにドイツ中から集まってくる第一級の優秀なバロック音楽の演奏家たちによって、文字通りの“バッハ・ゾリステン(バッハを得意とするソリストたち)”を結成した。従って、メンバーは、初めからヴィンシャーマンの芸術と人格を慕って集まってくる、著名なオーケストラの首席奏者や音楽大学の教授である彼の友人たち、及びその優れた弟子たちで構成されている。年配者と若い世代がバランスよく混ざり、メンバーも一定でないために、マンネリ化が避けられ、常にフレッシュな空気がアンサンブルにもたらされている。編成も弦主体だったり2管編成の木管が配されたり、12名から20数名まで自由に構成されている。ヴィンシャーマンの深い研究に基づく正統的な解釈による格調高い演奏は、メンバーの変動にも些かも変わらず、世界中の人々の心に感動をもたらし、世界のバッハ演奏の規範となっている。



プロフィール

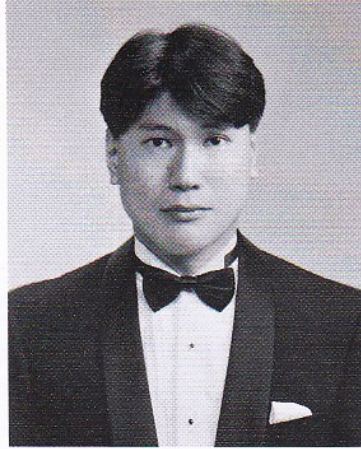


マーティン・ペッツォルト
Martin Petzold

1965年から1974年までトーマス合唱団のメンバーをつとめた。ライブツィヒ音楽院で学んだのち、1985年ハレのヘンデル劇場と契約、1988年よりライブツィヒオペラに在籍。数々のオペラハウスでゲスト出演する他、オラトリオ歌手、バッハの歌い手として国内外でコンサートを行っている。

トーマン合唱団やドレスデン十字架合唱団で定期的に歌うほかゲバントハウス、ライブツィヒ、ベルリン、シャウスピールハウスでコンサートを行っている。

レコーディングの他、多くのテレビ・ラジオ番組に出演している。ライブツィヒ・ドーラント・コンソートのメンバーとしてルネサンスやバロック音楽の演奏を行っている。



三原 剛
Tsuyoshi Mihara

1961年大阪に生まれる。大阪芸術大学演奏学科声楽専攻卒業。卒業時演奏学科長賞受賞。

これまでに、モーツァルト「レクイエム」、ベートーヴェン「ハ長調ミサ」、バッハ「マタイ受難曲」「ロ短調ミサ」「クリスマス・オラトリオ」等、宗教曲のソリストとしても活躍している。また、今年3月ヘルムート、リリング指揮の「ヨハネ受難曲」のイエスを演奏し好評を得た。

1989年リサイタル開催。1990年ニュルンベルク CVJM ホールに於いて日本歌曲、ドイツリート等を演奏し好評を博す。1991年ベルリンコミッシュオペラにて文楽オペラ出演。1993年NHKホールにおける「若い芽のコンサート」(NHK交響楽団)出演。

1991年、第22回日伊コンクール金賞受賞、1992年、第9回新波の会日本歌曲コンクール第1位および四家文子特別賞受賞。同年、第61回日本音楽コンクール第1位および増沢賞受賞。平成5年度五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。現在、大阪芸術大学講師。畑中良輔、クラウス・オッカー両氏に師事。



豊田 喜代美
Kiyomi Toyoda

桐朋学園大学卒業。ドイツのケルン国立音楽大学に留学。荻谷納、柴田陸陸、柴田喜代子、E.ボゼニウス、N.スターノ、F.エーガーマン、イタリアのミラノでF.フェラーリスに師事。

これまでに、数多のオペラに出演し、その新鮮な舞台はどれも好評を博している。特に「ホフマン物語」(小澤征爾指揮、鈴木敬介演出)では、キャラクターの異なる4役を見事に歌いわけ高い評価を得た。

また、シンフォニー、オラトリオ、ミサ曲のソリストとしても活躍し、深味のある暖かく透明な声質と知的な表現力は高く評価されている。

1887年ドイツのボン、ケルン、1989年アメリカ合衆国のワシントンでリサイタルを開催。1991年オランダでの北オランダ交響楽団定期演奏会に於いてのモーツァルトのモテット演奏は、全聴衆の熱狂的スタンディング・オーベーションを受ける大成功をおさめ、モーツァルトを歌うのに最も適した声と感性を持つと評された。

1983年度第11回ジローオペラ賞受賞。1984年度第16回サントリー音楽賞受賞。



佐々木 まり子
Mariko Sasaki

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程独唱専攻修了。毎日学生コンクール西日本1位。NHK 新人演奏会出演。伊藤巨行、小林道夫、森明彦の各氏に師事。

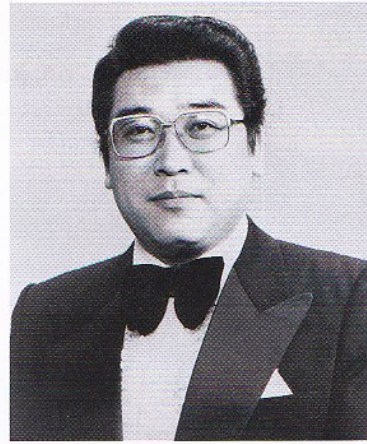
1980年にデットモルト北西ドイツ音楽大学に留学し、ヘルムート・クレッチマル、ハンス・クールマン両教授に師事。これまでに数多くの宗教音楽、歌曲演奏会に出演。

1985年、オルデンブルク、アーヘンにおいてヘンデル「ブロッケス受難曲」バッハ「復活祭オラトリオ」のアルト・ソロを見事に歌い上げ、好評を博す。

ドイツ歌曲、日本歌曲の分野における活躍もめざましく、特にシューマン、ブラームス、ヴォルフ、マーラーの歌唱には定評があり、又ソルフェージュ能力の確かさから、日本の作曲家の新作発表会にも度々出演、好評を博している。

数年来、田沢湖音楽祭の講師を務め、後進の指導にあたる傍ら、第九のソリストとして定評ある歌唱により活躍している。

東北大学混声合唱団、岩手大学合唱団各ヴォイス・トレーナー。グルッペ・ベッヒライン会員。



佐々木 正利
Masatoshi Sasaki

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程及び博士後期課程修了。声楽を畑中良輔、須賀靖元、小林道夫の各氏に、発声法を森明彦氏に、音楽学を服部幸三、角倉一朗の各氏に、作曲を松本民之助氏に、宗教音楽を岳藤豪希氏に師事。

1979年、ローレ・フィッシャー教授に師事。1980年第6回ライブツィヒ国際バッハ・コンクール声楽部門5位入賞。同年、デットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、ヘルムート・クレッチマル教授に師事。

1980年ウィーン楽友協会ホールに於るマタイ受難曲では、「若き日のペーター・シュライヤー」と新聞各紙で絶賛される。

現在、岩手大学教育学部音楽科助教授。元北海道教育大学非常勤講師。二期会会員。グルッペ・ベッヒライン会員。仙台バッハ・アカデミー理事。盛岡楽友協会副会長。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団各常任指揮者。岡山バッハ・カンタータ協会指揮者。水戸バッハ・コレギウム音楽顧問。



福島 明也
Akiya Fukushima

東京芸術大学卒業。同大学院修了。オペラ研修所第5期生修了。1984年第53回日本音楽コンクール入選、および木下賞受賞。1985年第54回日本音楽コンクール第1位受賞、および福沢賞受賞。第30回海外派遣コンクール特別賞受賞。1987年、文化庁派遣芸術家在外研修員としてミラノに留学。

1986年二期会公演「フィガロの結婚」のアルマヴィーヴァ伯爵でデビュー。

1989年「運命の力」のフラ・メリトーネ、モーツァルト劇場「ハムレット」のタイトル・ロールを演じ、共に大きな成果を挙げた。この好演により第17回ジロー・オペラ賞受賞。

1990年二期会創立40周年記念公演『お蝶夫人』（1904年ミラノ初演版に基づく新演出）のヤクシデを効果的に演じ、同年フィンランドのサヴォリンナ・オペラ・フェスティバルでの同公演でも同役を演じた他、特別演奏会ではヴェルディのオペラを中心とした見事な歌唱で絶賛され、国際的にも高い評価を得た。また、数多くのコンサートにおいてもソリストとして実力を発揮している。二期会会員。

プロフィール

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ.S. バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。その演奏が1991年ドイツにおいて「作品の語感、音、そして精神の完熟」という現地新聞の批評を受けるに至るまでには常任指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねがあった。

これまでの主たる活動としては、2回のドイツ演奏旅行でのメサイア、クリスマス・オラトリオ等の演奏、ヨハネ受難曲、ロ短調ミサ曲を始めとする多数のカンタータの演奏があり、いずれも好評を博している。

仙台宗教音楽合唱団

1967年佐藤泰平氏により仙台宗教音楽研究会合唱団として発足。1968年仙台宗教音楽合唱団として独立。1982年、佐々木正利氏が常任指揮者に就任。これまでの主たる活動としては、3回のドイツ演奏旅行をはじめ、シュッツ「ドイツ・レクイエム」、ヘンデル「メサイア」、バッハ「ヨハネ受難曲」「クリスマス・オラトリオ IV～VI」「ミサ曲へ長調」「モテット 1番、2番」「カンタータ 106番」他、数多くの演奏があり、定期演奏会は17回を数える。

岡山バッハカンタータ協会

1987年岡山で活躍中の声楽家と、アマチュアの合唱音楽愛好家達が、バッハの音楽の真髄にふれたいと、21名で結成。以来、ユニークな団体として各方面より注目を集めている。指揮には結成時より、日本を代表するバッハのスペシャリストである、佐々木正利氏を迎えて、定評のある厳しい指導の下、今日に至っている。

1992年5月の東京公演では、ソロも全て団員が受け持ち、ゾリステンと高い評価を得た。演奏活動は、バッハのカンタータを中心に年2回の定期演奏会を開催している。

東京放送児童合唱団

1952年3月にNHKの教育番組と子供番組との充実を目的として設立された。

1986年にBBC世界アマチュア合唱コンクール第2位入賞、1983年にはゾルタン・コダーイの生誕100年記念国際合唱コンクール青少年部門にシニアクラスの演奏が第1位を獲得し総合部門でグランプリを受賞した他、1984年度第20回モービル児童文化賞を受賞した。また1989年6月、BBU（世界放送機構）主催の世界合唱コンクールにおいて児童合唱部門で第1位に入賞する。現在団員数は、小学2年生～大学2年生総勢330名。スタッフは、近藤真司、古橋富士雄、靱山真紀子、篠井恵子、黒田道子。

バッハ作曲：マタイ受難曲

J. S. BACH/Matthäus-Passion

大バッハが聖トーマス教会時代に書いたマタイ受難曲の、オイレンブルグ版のスコアを見ているところですが、頁数にして336、曲数にして78に及ぶこの超大曲を、わずかの紙数で説明することは、とても無理な話です。

そこで「さわり」の、そのまた「さわり」を少々ということになりますが、そのことは大バッハも「主」も許して下さるでしょう。ところで曲の話に入る前に、編成についてちょっと触れておきます。

福音史家と訳されるエヴァンゲリストのテノールが進行をつとめますが、これがなかなかの大役で、曲の出来不出来を大きく左右します。そしてバスがイエス役。

それにソプラノ、アルト、テノール、バスの四人のソロと、左右に分かれた二つのコーラスと二つのオーケストラというわけですが、左右二部に分かれたために、一種のステレオ効果が生じ、独特の迫力をもっています。

第1部は荘重なオーケストラの序奏で幕が切って落とされ、それに「来たれ、娘たちよ、われと共に嘆け」のコーラスが続きます。第3曲はコラール「心より慕いまつるイエスよ、いかなる罪を犯せるとて」です。ごく短い曲ですが、深い感銘を与えるはずで

第26曲「われはわがイエスのもとに目覚め」は、美しいオーボエのオブリガードではじまり、テノールのソロ、そしてコーラスとふくらんでいきます。第33曲「わがイエスはとらわれたり」は、ソプラノとアルトの二重唱にコーラスが加わり、第1部の白眉といえましょう。壮麗な第35曲「人よ、汝の大いなる罪を悲しめ」で第1部は閉じます。

第2部はアルトとコーラスによる第36曲「ああ、今やイエスは連れ去られぬ」ではじまります。そして第47曲「哀れみ給え、わが神よ」となるわけですが、ヴァイオリンのオブリガードを伴ったアルトのソロで、少年時代の私が感涙にむせんだ曲です。肺腑をえぐるというのはこの曲のためにある言葉でしょう。

第58曲はフラウト・トラヴェルソと2本のオーボエ・ダ・カッチェに乗ってソプラノの歌うアリア「愛よりして主は死にたまわんとす」。続いて迫力に満ちたコーラスが第59曲「彼らますます声を大にしていう」を歌います。

そして感動の大きなうねりともいふべき、最後の第78曲「われら涙流しつつひざまづき」の大コーラスで全曲の幕を閉じます。

